童話の部
優秀賞

第37回 日産 童話と絵本のグランプリ

風おくりの夜

木村 亜里

あたたかな春の夜、子ギツネのテンはねむれません。

「ねえ、ここがへん。ざわざわってする。」

テンは、むねをおさえました。

「風おくりが、はじまるのかしらね。」

母さんギツネが、こたえます。

「風おくりって、なあに。」

「空から、風の子たちがおりてきて、春をおい出すのよ。」

「へえ。そうすると、どうなるの。」

「さあさあ、おそいわ。ぼうやはねむらなくちゃ。」

テンは、ぎゅっと目をつぶりました。でも、やっぱりねむれないのです。むねがざわざわして、ぐるぐるして。

（ぼく、風おくりを見てみたい。）

母さんギツネがねむったころ、テンはそっと、すあなをぬけ出しました。

くらい森は、しんとしずかです。風はやみ、おしゃべりな木の声も、虫たちの歌もきこえません。

（なんだか、こわい。）

見上げると、空にぽちんと一つ、みどりの星がひかっています。星はテンを見ると、ふるっとゆれました。そして、南の方へゆっくりうごき出したのです。ついておいで、というように。

テンは、小さな足でひっしについていきました。木の根につまずきながら、小川をわたり、背の高い草むらをぬけて。

どれくらいあるいたでしょう。ぽかんとひらけた場所に、知らない子がすわっていました。

きらきらした銀のマントなんてかぶって、木のえだで、地面にもようをかいています。

（だれ、何をしてるんだろう。）

テンは、せえの、といきをすって、

「こんばんは！」と、さけびました。

「こんばんは。」

くるりとふりむいて、マントの子は白い歯を見せました。

「ねえ、なにをしてるの。」

「風おくりのじゅんび。きょうだいが空からおりてくるから、目じるし作ってるんだ。」

テンは、はっとしました。

「じゃあ、きみは風の子？」

「そう。ぼくは、七人きょうだいの風のすえっ子、ヒュウ。」

「ヒュウっていうの。ぼくは、テンだよ。ねえ、ぼく、風おくりを見てもいい？」

「いいけどねえ、テンは小さいから、とばされちゃうかもしれない。」

テンは、ぷくっとほおをふくらませました。

（じぶんだって、小さいのにさ。）

すると、ヒュウはマントから、しゅるりとロープを出しました。

「これで、テンとぼくのからだをむすぼう。」

ふたりは、ぴったりせなか合わせになりました。

「すぐにはじまるよ。」

ヒュウがいうなり、トルトルトロロッ。

かろやかな音がして、ストンッ。

だれかが、地面におり立ちました。

「一のにいさん、こんばんは。」

「やあ、ヒュウ。」

銀のかみをうしろになでつけ、首からたいこをかけた少年が、立っていました。

「ヒュウ、そこにいるのはだれだい。」

「子ギツネのテン。ひとりでここまできたんだよ。」

一のにいさんは、口ぶえをふきました。

「そりゃ、すごいな。さあ、風おくりをはじめよう。」

トルトルトロロッ。トロトロトルルッ。

たいこの音に合わせて、つぎつぎにきょうだいたちがおりてきます。

二のねえさんは、トランペット。三のにいさんが、フルート。四のねえさんは、バイオリン。五のねえさんが、アコーディオン。六のにいさんは、タンバリン。

一れつになって、行進をはじめます。いっせいに、楽器が鳴り出しました。

（わあ。）

テンのむねが、鳴ります。

なんてはなやかで、まぶしい音たち！

たちまち、あたたかい風がぐうんとまきおこりました。風は長い手をのばして、おどるようにとび回ります。

きゃらきゃら、きゃらきゃらきゃら。

（風が、わらってる。）

テンは、目をまるくしました。

ヒュウも、小さなすずを鳴らして回ります。くるくると、テンもいっしょに。

「テン、見てごらん。春が出ていくよ。」

「ああっ。」

森一ばんのヤマザクラの花が、風にのって、えだからはなれていきます。つづいて、コブシもモクレンも、ユキヤナギの花も。ゆきのようにちっていくのです。

「風おくりって、きれいだろう。」

ヒュウが、とくいそうにいいました。

「でも、さびしいよ。春はどこへいっちゃうの。」

一のにいさんがそばにきて、うつむくテンのかたに、手をおきました。
「だいじょうぶ。春はこれから、しずかなところで休むんだ。とてもがんばったからね。そしてね、すぐそこに、わかばのきせつがまってるんだよ。」
「わかばのきせつって、なあに。」
すると、背中でヒュウがうたいました。
「わかばのきせつは、元気なきせつ。えだもはっぱもぐんぐんのびて、みんながみどり、みどりいろ。」
一のにいさんが、やさしくいいます。
「そう、わかばのきせつは、そりゃすばらしいよ。きっと、きみも好きになる。」
ほかのきょうだいたちが、声を上げました。
「ねえ、一のにいさん。あのひみつを、キツネくんにおしえてあげてよ。」
「せっかく、きてくれたんだから。」
一のにいさんは、うなずきました。
「ヒュウ、あの話をテンにきかせてあげるんだ。」
「わかったよ。」と、ヒュウはウインクして、とびきりのひみつをうちあけるように、声をひそめました。
「あのね、わかばのきせつがきたら、テンはすこし、おとなになるんだ。」
「ええっ。」
「背がのびて、かおもほそくなる。足だって、うんとはやくなるんだよ。」
「ほんとうかい。」
「ほんとうさ。ぼくもそう。すこしおとなの風になって、とおくまでとべるんだ。」
「へええ、すごい。すごいね。」
テンはうれしくて、なんだかくすぐったくてたまりません。
「風おくりは、春をおい出すだけじゃない。こころにゆうきがある子を、大きくしてくれるんだって。ねえ、一のにいさん。」
「ああ、テンはひとりでやってきた。とてもゆうかんだよ。きっと、大きくなれる。」

テンはむねをおさえて、気になっていたことをたずねました。
「あのね、ここがざわざわ、ぐるぐるするんだ。これは、なんだろう。」
すると、ヒュウがうれしそうにいいました。
「ぼくもするよ。ざわざわ、ぐるぐる。もうすぐ大きくなるしょうこなんだって。」
「なんだ、そっか。そうなのかあ。」
ヒュウが、テンの手をつよくにぎります。テンもにぎりかえしました。
「さあ、ずいぶんおそくなった。ヒュウ、テンをうちまでおくってあげるんだ。」
一のにいさんが、ヒュウのかたをたたきます。
「はあい。それじゃ、テン、いくよ！」
ヒュウがさけぶなり、ふたりはふわっとうき上がりました。テンが、声を上げます。
「わあ、すごい！」
いつのまにか、空にはたくさんの星がきらめいています。黒々としたモミの林をこえ、小川をこえ。テンとヒュウは、すあなのちかくにおり立ちました。
ふたりをむすんだロープをといて、ヒュウは、はずかしそうに言いました。
「きてくれてありがとう。楽しかった。」
「ぼくも、とっても楽しかった。」
ふたりは、目を見かわしました。
「あのさ、また会える？」
テンがそっとたずねると、ヒュウはついと目をふせました。
「テンが大きくなったら、ぼくのことは見えなくなる。一のにいさんがいってたんだ。そうだ、これをあげるよ。」
ヒュウはテンに、銀のすずをわたしました。
「会いたくなったら、鳴らしてよ。とおくにいたって、かならず会いにくるよ。見えなくても、ぼくはちゃんといるから。」
「うん、わかったよ。」
テンの目にも、ヒュウの目にもなみだがうかんでいました。でも、テンはがまんしました。
（ぼくはなかないぞ。ゆうかんなんだから。）
ふたりは、長いこと手をふって、わかれました。
その夜、テンはゆめも見ないほど、ふかくふかくねむりました。
つぎの朝、しっかりした足どりで、テンは外へ出ました。
森じゅうが、すずしいはっかのかおりにつつまれています。お日さまをうつして、はっぱの一まい一まいが、ぴかりぴかり、みどりにかがやいているのです。
テンは、見とれました。その足は、きのうよりすいと長くなり、ひとみは、すきとおるようなわかばいろでした。

木村 亜里
41才　アルバイト　福岡県福岡市

受賞のことば

きのうより大きくなりたい、成長したいという思いは、子どももおとなも変わらず、まぶしいものだと思います。そのまぶしさを、季節のうつりかわりにのせて書きたいと思いました。素晴らしい賞を頂き、しずかな自信になりました。これからも、楽しみながら物語を紡いでいきます。ありがとうございました。

審査員コメント

短いながらも美しく抒情的な作品でした。印象的なオノマトペや修辞を用いた、作者の言葉の感覚が物語に輝きと深まりを与えているのだと思います。ラスト、風たちがテンに告げる秘密がいまひとつ弱いところだけが残念。あと一歩の工夫がほしいところです。

富安 陽子